

雅子
漱死
水す

石田
雅子

稚子 薨れず

石田 稚子



表 現 社

昭和二十四年八月五日印刷
昭和二十四年八月十日發行
昭和二十四年十月十五日再版

定價 百五十圓

著 者 石 田 雅 子

東京都中央區日本橋茅場町一ノ一八
「中央起業」內

發行者 豐 島 清 史

東京都千代田區內幸町二ノ三

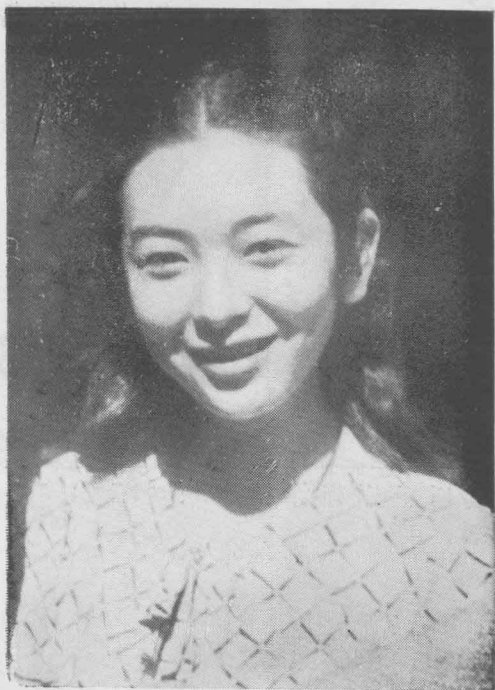
印刷者 羽 田 政 勝

東京都中央區日本橋茅場町一ノ一八「中央起業」內

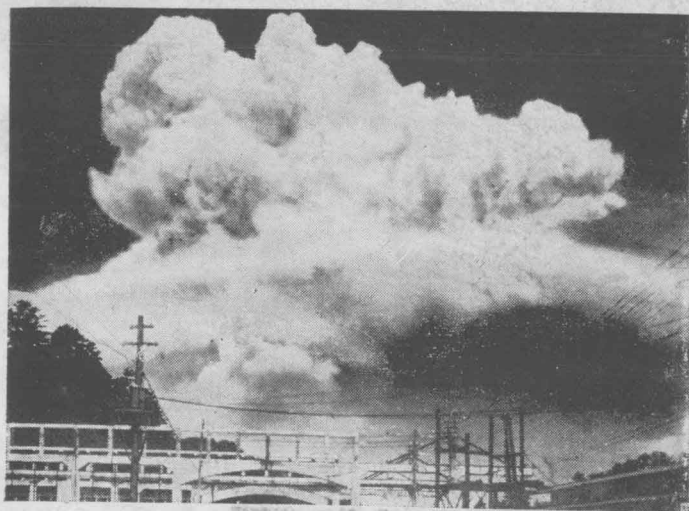
發行所 表 現 社

電話茅場町 (36) 八七五八一五〇番番





：私は何気なく時計を見ました。——十二時少し前でした。それから、本當にそれから間もなくでした。あの恐ろしい恐ろしい原子爆弾が投下されたのは。あの「ピカッ！」が起つたのです。あたりが桃色にクワツと熱く光りました。私は思わず目をつむりました。：と語る當時（十五才）の雅子さん



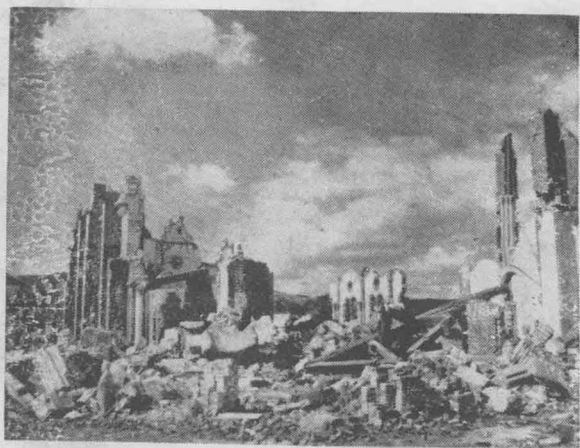
原子爆弾炸裂直後の爆雲
(1945年8月9日午前11時2分)



彫像悲し(天主堂のヨハネとマリヤ像)



一年前の遭難場所に佇んで、
偲ぶ雅子さん



浦上天主堂廃墟の全景



永井隆博士を見舞う雅子さん

「あの原爆で死んだ人たちは、どんなに叫びたいか知れない。平和のためにね。僕たち生き残ったものは、かれらに代つて、世界に叫んでやる義務があるのだ。ねえ、雅子さん、僕はそう思っていますよ。」

こうした永井先生のおことばは、泉のように次から次と湧き出でてなかなか盡きそうにもない。私は、ひとこともものをいわずに、黙つて先生のおことばにうなづいていった。

雅子斃れず

石田雅子

あなたの本の重版を祝います。一點は方向をきめません。もう一點うつと方向がきまります。その直線上にさらに第三點をうち、第四、第五どうちゆけば、ひとすじの人生行路となります。

あたえられた天分をこの方向にふるいなさるよう、おすすめます。

いただいたシヤクヤクを寫生しましたのでさし上げます。表紙にお用いになつてもよろしいです。何にも用いられないのもよろしい

です。

子供たちが學校から歸つてから、くりまんじゅうを、もしやもしやたべました。

子供が何もしやべらず、もしやもしやおぼる光景をみるのは父の幸福です。

一九四九年五月十七日

永井

隆

石田雅子様

序にかえて

永井隆

原子雲の下に生き残つたというだけでも、おろそかならぬ君の生命であり、私の生命であつた。原子病の苦しさにうちかち、原子野に生き長らえた一日の生命の歩みはきびしかつた。

そうして今、君の庭に咲いたとて君から贈られたシヤクヤクの花をみる。焼野に芽生え、同じくきびしい生命のいとなみを續けて、ついに今年はこうも美しく咲き出でた花をみる――。

よくぞ生き抜いてきた、花も、君も、私も……………

しみじみと茶を口に、シヤクヤクのういういしい花びらに見入れば——
生きている、私は生きている……という實感が、ぐうつと五體にゆきわたる。
この茶も、あの日吹き拂われた、わが畑のふちの焼株から芽を出し、年を追う
て茂り、ことし始めて摘むほごになつたもの、天地の生氣をこの一葉一葉に吸
い集めたかの如き新茶の香りである。

生きているという事は何ものにも比べられぬほど尊い。原子雲の下の日から
シヤクヤクの花咲く今日にいたるまで保つてきた生命であるがゆえに、こうも
尊く思われるのであろうか？——

シヤクヤクも苦勞したろう、茶も苦勞したことだろう、そして君も……。私
はやつと生きてきた。

——どんなに苦しくても、どんなに悲しくても、生きてゆく事そのことが重
荷のように辛くても、生きていることにまさる喜びはない。生きておりさえす

れば仕事ができる。この世を美しくする仕事が――

草でさえ、木でさえ、ほそい生命を生き續けて、荒野を小さい花で飾つた。

長崎を國際文化の都市として建設することに國法で定められ、私たち市民はこの街に國際的な平和文化の花を咲かせる仕事をもつことになつた。私たちの仕事は大きい。

しかしその手始めは、原子爆彈の實相を廣く世界中の人々に知らせ、戰爭をいやにならせ、戰爭を思い止まらせ、平和を永遠に保とうと願わせ、努めさせることである。

世界永遠の平和が約束されなければ、いくら國際文化を作り上げたつて、まるで淺間火山の上に文化住宅を建てるようなもの、戰爭の火が噴き出すたびに、こつばみじんにされてしまう。

君は今、この永遠平和の願をこめて、君の尊い原子爆彈體驗記を世におくる。

——あやしい光を放ちながら空を被つた原子雲の下、屍のあいだに生き残つてゐる自分を自覺した君は、そのとき年わずかに十五歳であつた。——十五歳の少女のやわらかい膚は切られて血を噴いた。幼い骨髓は放射線を受けて潰れた。人の世の痛みを知らなかつた心は原子野よりもひどく碎かれていた。——君はその體驗をそのとき直ぐ、十五歳の少女の感覺で書きつけた。

それは新しいカメラで寫したフィルムを、作つたばかりの現像液で仕上げたように、濁りがなく、ひずみが無く、まことに鮮かに、あの原子雲の下の有様を寫し出している。——これが原子力の場の中に、ひとりさらされた人間の眞のすがたであつた。

血の流れる首を黒いカーテンで巻き、片ちんばのげたをはき、火の林の中を、よろよろと逃げてゆく人間——文化人とみずから稱えていた人間も、いつたん原子戦の中にまきこまれると、このような姿をさらすことになる。

……君はしかし、別にこのような説教じみた下心で、この記録をこどめたのではなかつた。あどけなく兄さんにおしやべりする氣で書いたのだつた。それだから、文章は素直で、飾りけがない。したがつて、いよいよ眞に迫つてゐるのである。

ほかの原子爆弾記録に比べて、あの日のむごたらしい現場の、描寫が足りない、と思う人があるかも知れない。しかし、ここにこそ君の記録の正直さがある。いや、記録以前の心の美しさがある。情のこまやかさがある、——生きてゐる人間がある。

やさしい心のもちぬしには視るに堪えぬ有様であつたのだ。ああ、死の手につかまれた友の叫び、生きながら燃えゆく友のにおい、目にうつるは既に息絶えた友の黒髪……君は目を伏せ、耳をおさえ、息をつめて、死の谷を逃げまどつた。ともすれば君みずから黒い死の手につかまえられるやうな、迫つた状況

であつたのだ。どうして、のうのうと、ゆうゆうと、冷やかに、あちらを見、こちらを眺め、よい文章の材料はないか、と探すことができるであらうか？

これは正に偽りのない人間の記録である。人の世にすれていない少女であつたからこそ、こう感じ、こう書けた。

君はお父さんの腕に抱かれようとの願ひとすじに火の中を走つた。——い——
——もう走れなかつた。原子病のすでに現われた五體は杖をたよりに、よろめき歩むのが、やつこのことであつた。はた目から見ると夢遊病者のようであつたろうが、君は一刻も早くお父さんの廣い胸に救われたいと、競泳のような努力で、放射線の亂れとぶ中を、わき目もふらず泳いでいつた。……その君のすがたを想うと、父と子との相引く力の強さが……………

一九四九年五月十七日

長崎市浦上 如巳堂にて

目次

原爆地寫眞集

永井博士より著者への手紙

序にかえて

永井隆

第一部

運命の日……………一九

雅子斃れず……………四三

原子爆の闘い……………六三

新生……………七五